

歎異鈔の信仰

松 永 大 覚

一

歎異鈔の信仰とは浄土真宗の信仰であり、親鸞聖人の信仰である。歎異鈔とは言葉の如く親鸞聖人の信仰と異なる信仰を唱えて当時の人々を惑わし、正しき真実の信仰を乱すことを非常に悲歎して、親鸞の教を直接蒙つたものがこれを十分に味得し体得して親鸞の教に基礎を置いて異義、異安心を徹底的に批判し斥けて、後世の人々に親鸞の真実の信仰を一言々々血をはく思いで、而かも謙虚な純真な態度を以て書き記された尊いお聖教である。

歎異鈔はまことに小冊子ではあるが古今東西に比類のない宝典である。この宝典が明治の末期より宗門の内外に普く行きわたつて凡ゆる人々に親しまれたのである。宗教に関心を持つもの、或は宗教に入ろうとするものは是非拝読しなければならぬ最も有難い、尊い浄土真宗のお聖教である。即ち親鸞の熱烈な信仰の告白書であ

り、親鸞の全思想の結晶でもあるのである。特に本願寺第八代蓮如上人はこのお聖教に真実の価値を認められて尊重せられたのである。

「乃ちこの聖教は当流大事の聖教なり、無宿善の機に於ては左右無く之を許す可からざるものなり」と。
奥書されている。

歎異鈔は大体両部に分れ前部は緒言の「竊廻_レ愚案_二」より第十章の「念仏には無義をもて義とす不可称不可説不可思議のゆへにとおほせさふらひき」とある迄であつて、後部は次の別叙「そもくかの御在生のむかし」より終りまでである。

前部は「故親鸞聖人御物語之趣所_レ留_三耳底_二」を十ヶ章掲げ、親鸞御在生の古えを偲びつつ懐かしく親鸞の御教訓を挙げたのであつて、作者の言葉が附加されていないのである。これは破邪顕正より見れば顕正が主体であるが裏には必ず破邪があるのである。

後部即ち八ヶ章こそ破邪が主体である。当時流行した異義異安心を指摘して大いに悲歎し痛烈に批判して斥けられたのである。これこそ歎異鈔の当相であり面目である。

即ち別叙に

「聖人のおほせにあらざる異義どもを近來はおほくおほせられあふてさふらふよしつたへうけたまはる、いはれなき条々の子細のこと」と。

総結には

「右条はみなもて信心のことなるよりことおこりさふらふか」と。

このいわれなき条々こそ後部八ヶ章であつて正しく歎異鈔の中心である。作者の悲歎が如実に表詮され心血を以て破邪せんとすることが明らかに知ることが出来るのである。即ち親鸞の法燈が永遠に光り輝く様にと念じつゝ遍述した宝典である。

更に作者は懇切丁寧に当時の異義異安心を批判する準備として親鸞のおほせを顕示したのである。其の親鸞のおほせ、そのものは独断的でなく専修念仏教団の大道であることを顕示せんが為に親鸞の師、法然上人を初めとして法友聖覚法師、隆寛律師の撰述から要文を抜萃して歎異鈔の附録とせられたのであつた。

即ち総結に

「かくのごとくの義どもおほせられあひさふらふひとゝにも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらはんときは、故聖人の御こゝろにあひかなひて御もちるさふらふ御聖聖どもをよく御覧さふらふべし、おほよそ聖教には眞実権仮ともにあひまじはりさふらふなり、権をすてゝ実をとり、仮をさしおきて眞をもちあるこそ聖人の御本意にてはさふらへ、かまへて〳〵聖教をみ、みだらせたまふまじくさふらふ、大切の証文ども少々ぬきいでまいらせさふらふて目やすにしてこの書にそへまいらせてさふらふなり」と。

この大切なお聖教の信仰を私の現在までに味得した所のを特に第二章を中心として述べたいと思う。

二

歎異鈔の第二章は熱烈に信仰を求める者に対して親鸞が御自身の求道上の實驗を告白して信仰を勧められたものであつて、歎異鈔全十八ヶ章中最も味い深い一章である、而して又この章は親鸞御自身の信念を率直に述べられ、而かも信仰をすこしも強制しておられないのである。即ち宗教の自由（信教の自由）を早くも鎌倉時代に於て強調しておらるる点を注意しなければならぬ、この章ほど端的に浄土真宗の信仰、即ち親鸞の信仰を顯示されたものはない。親鸞の時代には仏教各宗に於ては掲げる題目と云うものはなかつた、その時に當つて親鸞の師法然上人が「たゞ念仏せよ」と仰せられた。これが其の時代に一大センセーションを起し、一般大衆を強く惹きつけたのである。この「たゞ念仏せよ」の題目こそその時代の人々を救済する所の唯一の道であつたのである。親鸞はこの教に自己の喜びを発見して、更に念仏の意義を明らかにして信心為本を強調されたのである。斯くの如き意味に於て歎異鈔は救済を求めてやまぬ人々の心の燈となり明治以後に於て若き人々の心を強く惹きつけたのである。

第二章の初めに「おのおの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずし、たづねきたらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極楽のみちをとひきかんがためなり」とある。この言葉は信仰を求める態度の真剣さをまざまざと示しているものであつて、実に驚かざるを得ない。或は「十余ヶ国のさかひをこえて」と云い、或は「身命をかへりみずして」と云う、今から約七百年前の鎌倉時代に關東の常陸の国から京都へ上ろうとするには下総、武蔵、相模、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江の十余ヶ国を越えなければ京都までは来られないのであつて、まことに身命を賭しての求道でなくてはならなかつた、まさにこの聞法の旅は命がけであつて、親

子兄弟は水盃をして門出をしたことと思うのである。而らば関東の人々が京都まで遙々と親鸞を尋ねて来た動機は何であつたらうか、それについて古来から種々の説があつて、或は親鸞の長男慈信房善鸞の異義とか、或は日蓮上人の四ヶ格言に動揺した為に来たのだらうかと云われてゐる。それ等のことも何ほどの機縁にはなつたであらうが、身命をかえりみずしてまで親鸞を尋ねた根源的なものではなかつたと思ふのである。即ち慈信房善鸞の異義とは善鸞は念仏より外に助かる法門のあることを主張した教義の異端者であつた、又日蓮上人の四ヶ格言とは普通「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」と称するものである。之等は念仏によつて救われる事を信じていた関東の人々にとつては大きな痛心事であり、驚きであつたのである。それも普通一般の人間の云う事ならば左程驚かなかつたであらうが、一人は親鸞の血肉を分けた長男であり、今一人は宗教改革の精神に燃える青年僧日蓮であつたからその驚きは大きかつたのである、而しよく考えて見ると善鸞や日蓮に動かされる程のものならば親鸞を尋ねて来たところ又親鸞に動かされて離れるものである。即ちその自己は動く自己であり、動される自己である。親鸞が念仏によつて救われると云われたのは人間が人間の理知によつて選んだものではない、往生極楽の道は人間の一切の理知を越えた所から与えられる道である、それゆゑ関東からはるばると京の親鸞のところまで尋ねに来た大きな根底をなすものは人々の夫自身の信仰の浅薄さではなかつたであらうか。

親鸞がこれらの人々を迎えての感情は如何であつたらうかと推察すると深い感激でもあつただらうが、又同時に二十余年に亘つて親しく語り合ひ、共に念仏した間柄でありながら如来のお心が何故に解つてくれなかつたのであらうかと何か淋しく、悲しく思われたことであらう。それにしても我が心が彼等の真実の心持に触れない為

に却つてこれ等の人々を惑わしはしなかつたかとも親鸞は思い悩まれたことであろう。往生の一大事を決定する道を求めることは難中の難事であつて法を求めるのに如何に真剣であつたかをこの人々は我々に教えているのである。

親鸞は浄土和讃に（二十九首）

「タトヒ大千世界ニ

ミテラン火ヲモスギユキテ

仏ノ御名ヲキクヒトハ

ナガク不退ニカナフナリ」と、

よくよく案ずれば誠に聞き難き法であり、私は未熟である。而るに今ここに法然上人のお導きにより真実の法に遇うことの出来たのは全く宿縁の賜であると讃嘆せられたのである。

即ち本典総序に

「噫弘誓強縁多生難_レ値真実浄信億劫難_レ獲遇々獲_三行信_二遠慶_二宿縁_一若也此廻覆_二蔽疑網_一更復逡_二歴曠劫_一誠哉撮取不捨真言、超世希有正法聞思莫_二遲慮_二爰愚禿親鸞慶哉西蕃月支聖典東夏日域師釈難_レ遇今得_レ遇難_レ聞己得_レ聞敬_二信真宗教行証_二特知_二如来恩德深_二斯以慶_レ所_レ聞嘆_レ所_レ獲矣」と。

又難値難信の法を大経和讃に（十八、十九、二十首）

「如来ノ興世ニアヒガタク

諸仏ノ経道キ、ガタシ

菩薩ノ勝法キクコトモ

無量劫ニモマレラナリ

善知識ニアフコトモ

オシフルコトモマタカカタシ

ヨクキクコトモカタケレバ 信ズルコトモマタカタシ

一代諸教ノ信ヨリモ 弘願ノ信樂ナヲカタシ

難中之難トトキタマヒ 無過斯難トノベタマフ」と。

全く不惜身命の態度で法を求めなければならない。

「しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんはおほき取るおやまりなり。もししからば南都北嶺にもゆゝしき学生たちおほく座せられてさふらうなれば、かのひとびとにもあひたてまつりて往生の要よくゝきかるべきなり」

はるばる人々は何を求めに來たか、それは往生極樂の道であり、而かも念仏より外のものを求めに來たのではなかつたか。ここにこの章の大切な意義がある。若しこの親鸞が念仏より外に眞実に生きる道を知っているかの様にも思い、又学問等を知つていてそれを我々に教えて下さらないと心に怒りを持ちながらこの親鸞の心底を知りたいと思つて來たのならそれは大きな誤りであると、人々の予期を根本から覆えされたのである。この言葉の裏に念仏一途の純粹な信仰が伺われるのである。はるばると生命を賭して尋ねて來た人々に対し、何とかして念仏の一道に徹底させてやりたいと云う強いお心が動いている。それ故に「奈良、叡山の優れた学者達に充分お聞きしなさい」と少々激した言葉を用いられているのである。而かもこれだけのことを申されるのに直截簡明にお示しにならずに長々と前置きされたのは念仏で救われる事は易の易たることを顕わさんが為である。この親鸞のお心持を深く頂かねばならないと思う。

三

次に親鸞自身の信仰の喜びを明示されている

「親鸞におきてはたゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと。よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総してもて存知せざるなり」

ただ念仏して弥陀にたすけられると云う所に親鸞の信仰が尽きているのであつて、これのみが生死の迷の世界を超ゆる唯一の道であり、この外に往生極楽の道のあるべきいわれはないのである。念仏は単なる口業ではなくてそれは内なる久遠劫来の闇を照す無碍光如来の自愛用三昧である。念々の称名ではあるが一念々々無限であり不可称、不可説、不可思議である「たゞ念仏して」ここに全体が具現しているのであつて親鸞の姿そのまま「たゞ念仏して」である。念仏より外に法文沙汰の無いことを願わして関東の人々に純正な他力念仏の正信を述べられたのである。他力の念仏はただの口称ではない。又称えようと思つて称えるのでもなくて称えしめられる念仏であつて自然法爾である。即ち信海流出の念仏であり、如来の勅命の反応であつて全く子細なき念仏である。

故に本鈔第十章に

「念仏には無義をもて義とす不可称、不可説、不可思議のゆへにと」と。

又第八章には

「念仏は行者のために非行非善なり、わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ、わがはからひにてつくる善にあらざれば非善といふ、ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なり」と。

学問や智慧によつて念仏は浄土往生の種であると云う確信を得たのではない、又念仏往生と云う理論的根拠を得られたからの念仏でもない、全く絶体者如来の独き働きである。即ち念仏が主体となつて生きるものである、念仏して往生する事は浄土教の通念ではあるが、自我性の念仏態度に於ては往生が目的であり、念仏は手段になるから有限化されるが今称える念仏は与えられたものであると云う所に無限の感が深いのである。

故に正像末和讃（三十四首）に

「智慧ノ念仏ウルコトハ 法蔵願力ノナセルナリ

信心ノ智慧ナカリセバ イカデカ涅槃ヲサトラマジ」と。

又本典行巻に

「大行者則称ニ無碍光如来名ニ斯行即是撰ニ諸善法ニ具ニ諸徳本ニ極速円満真如一実功德宝海故名ニ大行」と。

又同じく行巻に

「爾者称ニ名能破ニ衆生一切無明 能滿ニ衆生一切志願ニ称名則是最勝真妙正業正業則是念仏念仏則是南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏即是正念也可知」と。

又蓮如上人は御文章五帖目(第十三通)に

「ソレ南無阿弥陀仏とマウス文字ハソノカズワツカニ六字ナレバサノミ功能ノアルベキトモオボエザルニコノ六字ノ名号ノウチニハ無上深甚ノ功德利益ノ広ナルコトサラニソノキハマリナキモノナリ、サレバ信心ヲトルトイフモコノ六字ノウチニコモレリトシルベシサラニ別ニ信心トテ六字ノホカニハアルベカラザルモノナリ」と。

誠に親鸞こそ念仏の尊き威大なる功德を如実に信知されたのである。

「念仏は浄土のたねか、地獄の業か知らない」と喝破されたのは大胆な表現ではなくして沈痛な慚愧である。

この慚愧の底に謙虚な明るい信の芽生えが生じているのである。「たゞ念仏する」と云うことが如来の選択本願であつて「弥陀にたすけられる」とは選択本願の廻向である。混沌たる今日の世相に於て人々は只この一言を要求して居るのであつて、それ以外何も欲していないと思ふのである。知らないとは私に知る必要もなく、又用事のないことであつて私にとつて問題ではないのである。問題とする所は「よき人のおほせをかうむりて信ずるよりほかに利の子細なきなり」である。

智慧のない、学問のない愚禿親鸞が法然上人の仰せによつて念仏するより外に子細はないと云われたのである。それは何故かと云えば「いづれの行もおよびがたき身なれば」こそである。念仏は浄土の因か、地獄の業かを知らぬものはない。而し知つてゐるのは自我である、自我が知る以上功利的である、故に念仏を浄土往生の因として修したがるのであつて、その念仏には救われぬ自力の執心が離れないのである。親鸞は比叡山以来この行に精

進せられたのである、その行に励まれたことの如何に勇敢であつたかは「いづれの行もおよびがたき身なれば」とその精進の甲斐なかつた時の悲しみを述べられたことを見てもその様子が偲ばれるのである。

正像末和讃（第十四、十五首）に

「正法ノ時機トオモヘドモ 底下ノ凡愚トナレル身ハ

清淨真実ノコ、ロナシ 発菩提心イカマセン

自力聖道ノ菩提心 コ、ロモコトバモオヨバレズ

常没流転ノ凡愚ハ イカデカ発起セシムベキ」と。

言語に絶した苦行の体験の結晶であり、其の流露である。親鸞はこの自力心を凝視してこれは一世や二世の迷いではないと痛感せられたのであろう。この間の消息を正像末和讃（第十六首）に次の如く書かれている

「三恒何沙ノ諸仏ハ 出世ノミモトニアリシトキ

大菩提心ヲコセドモ 自力カナハデ流転セリ」と。

この自力自我の計執の抜かれ離れた所に念仏は独り働いて尽くる所を知らないのである。親鸞は「自余の行をばげみて仏になりべかりける身が」と、身命を捨てての叡山に於ける二十余年の学問、修行がいかに空しかつたかを衷心から叫んで居らるのである。「いづれの行もおよびがたき身なれば」と云う態度が宗教であり、念仏でなくて何であらうか。又「いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と云う自我性のうち砕かれた態度がそのまま「念仏まふさんとおもひたつ心」である。「いづれの行もおよびがたき身」を自

らの内に発見するのである。その主体的なものが誓願不思議であり、地獄一定を感じる主体が大悲であつて其の表現が念仏なのである。

「いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」の親鸞のはげしい体験の告白に遇うたびごとに私の求道心の浅薄さを省みて慚愧に堪えないのである。この告白は親鸞御自身の告白であるけれども一層深く味う時親鸞によつて代表された人間性の総決算として有難く味えるのである。

四

親鸞は最後によき人の仰せによつて念仏する他力の信仰は私の独断でもなく、盲従でもなく全く無私の随順であることを顕示して「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおはしまさば善導の御釈虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや、法然のおおせまことならば親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらうか」と仰せられている。これは「よきひとのおほせ」に対する根強き確認である。即ち弥陀の本願、釈尊の説教、善導の御釈を背景としてよき人法然上人の仰せを拡充されたのである。弥陀、釈迦、善導、法然と列べて法然上人の仰せの真実なることを述べられたのである。

弥陀の本願とは第十八願のことであり、釈尊の説教とは本願成就の経説のことである。而して弥陀の本願と釈尊の説教と端的に示されたのが善導大師の往生礼讃に

「若我成仏十方衆生称_レ我名号_二下至_一十声_レ若不_レ生者不_レ取_二正覚_一彼仏今現在成仏当_レ知本誓重願不_レ虚衆生称念必得_二往生_一」と。

ある御文である。この御文を法然上人は御自影に書して親鸞に授与されたのである。これを親鸞は本典化土卷末の終りに

「然愚秃釈鸞建仁辛酉曆棄_二雜行_一今帰_二本願_一元久乙丑歳蒙_二恩恕_一今書_二選択_一同年初夏中旬第四日選択本願念仏集内題字并南無阿弥陀仏往生之業念仏為本与_二釈綽空_一以_二空筆_一今書_レ之同日空之真影申預奉_二図画_一同二年閏七月下旬第九日真影銘以_二真筆_一今書_二南無阿弥陀仏与_二若我成仏十方衆生称我名号_一下至十声若不生者不取正覚彼仏今現在成仏当知本誓重願不虚衆生称念必得往生之真文。」と。

これ即ち法然上人が偏えに善導大師に依る、宗義を親鸞に授与されたのである。されば弥陀、釈迦、善導、法然と列挙して法然上人の仰せの真実なることを立証すると共に親鸞自身の信仰も主観的のものでないことを述べられたのである。即ちよき人の仰せと弥陀の本願とは別なものではないと云うことを顕示されているのである、所謂念仏は弥陀の選択本願より始つて釈迦、善導、法然と伝統相承して来た真実道であることを示されたのである。

蓮如上人は御文章四帖目第九通に

「阿弥陀如来のおほせられけるやうは」と。

これ即ち弥陀の本願は阿弥陀如来の仰せであり、阿弥陀如来の仰せは第十八願の

「十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念」である。

これをそのまま説かれたのが釈尊の説教である。故によき人と云うのは弥陀の本願に随順信願した人である。よき人を通さなければ、弥陀本願は抽象的な理論である、故によき人を通して始めて弥陀の本願は現実のものとなるのである。即ちよき人の教を信ずる事は単に人間中心の思想ではない、人間を通して始めて法は胸に響くのである。

よき人の仰せを追求してゆくと弥陀の本願であつて、弥陀の本願をそのまま釈尊は大無量寿経の願成就文を背景に観無量寿経（下々品）を説かれ、善導大師は観無量寿経の説法を通して弥陀の本願を聞かれ、法然上人は善導大師の観経を註釈された四帖疏の散善義を通して真実の光を発見され、親鸞は法然上人の仰せ、即ち選択本願の教即ち選択集上に

「深心者謂深信之当_レ知生死之家以_レ疑為_三所止_一涅槃之城以_レ信為_三能入_一と。
ある是である。親鸞はこれを正信偈に

「還來生死輪轉家 決以_三疑情_一為_三所止_一

速入_三寂靜無為樂_一 必以_三信心_一為_三能入_一と。

仰せられてある。即ち法然上人の御教化により始めて弥陀の本願を理論や推論でなく仏の慈悲を感じ得られたのである。

「法然のおほせまことならば親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふか」と。

仰せらるるは親鸞の大きな感激と涙があるように思う、即ち「ひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられ弥陀の本願でなければ絶体に救われない事を体得された親鸞なるが故に「親鸞がまうすむね」と云わざるを得なかつたのであると推察するのである。親鸞は全生命を念仏にかけたのである。かけると云つても賭けではなくて懸であり繫である。理解して念仏するのでもなく、念仏の意義を知つて念仏するのでもないから、地獄のたねか、極楽のたねかを一切詮議する必要はない、ただ念仏して弥陀に救われるのである。誠に「弥陀の本願まことにおはしまさば」の一句に選択本願の大道を顕示されたのである。而して「詮ずるところ愚身の信心にきてはかくのごとし、このうへは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云云」と。結ばれたのである。それは「親鸞におきてはたゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり」と云う心境である。絶体救済の本願を子細なく信ぜられたのが「愚身の信心」であつたのである。この愚身の信心には何等の思慮分別も容れず、又何等の智慧も雜えない絶体随順の心である。

この御意を蓮如上人は御文章一帖目第一通に

「故聖人のおほせには親鸞は弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ、そのゆへは如来の教法を十方衆生にとききかしまむるときはたゞ如来の御代官をまうしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法をもひろめず如来の教法をわれも信じひとにもおしへきかしまむるばかりなり、そのほかはなにをおしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり、さればとも同行なるべきものなり、これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきてお

ほせられけり」と。

浄土門は「愚有」としてひざまずく所に開ける生命の大道である。これ十悪愚痴の法然によって開けた道であり、愚禿親鸞によつて体験せられた道であつたのである。されば「愚身の信心」を盲従、屈従の信と誤解してはならないのであつて信心は智慧であり、自覚の生命である。信心の智慧は人間が仏の如くになつて磨き上げるものでなくて、人間の愚かさに気づいて謙虚に如来の知見に信順する恵みである。即ち信心は恵まれた智慧である。如来から恵まれた智慧によつてのみ如来を仰ぐことが来るのである。愚禿親鸞の上にこそまことの信心の智慧が恵まれて真実の救いを体験せられたのである。

これを安心決定鈔末の「自力他力日輪の事」によく顕示されている。即ち

「自力にて往生せんとおもふは闇夜にわがまなこのちからにてものをみるとおもはんがごとし、さらにかなふべからず、日輪のひかりをまなこにうけとりて所縁の境をてらしみる。これしかしながら日輪のちからなり、たゞし日のてらす因ありとも、生盲のものはみるべからず、またまなこひらきたる縁ありとも闇夜にはみるべからず、日とまなこ因縁和合してものをみるがごとし、帰命の念に本願の功德をうけとりて往生の大事をとぐべきものなり、帰命の心はまなこのごとし、攝取の光は日のごとし、南無は即ち帰命これまなこなり、阿彌陀仏はすなはち他力弘願の法体これ日輪なり、よて本願の功德をうけとることは宿善の機南無と帰命して阿彌陀仏となふる六字うちに行万善恒沙の功德たゞ一声に成就するなり、かるが故にほかに功德善根をもとむべからず」と。

信心は自分の智慧、才覚で得られるのではなく「たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうむりて信ずるほか」はないのである。

全く師法然上人の賜であると深き感謝と絶体の信順を顕示して居られるのである。

高僧和讃源空章（第四首）に

「曠劫多生ノアヒダニモ 出離ノ強縁シラザリキ

本師源空イマサズバ コノタビムナシクスギナマジ」と。

以上を結んで「このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからひなり」と。

これははるばる来た関東の同行達に對して如何にも冷淡な態度を取られた如く思うが、宗教は自由であり、宗教は強制すべきものではなく、又私すべきものではない事を顕示されたのである。即ち親鸞は法に私を入れない厳肅な態度が表われて居る。念仏は弥陀の選択本願より始つて釈迦、善導、法然と伝統相承して来た道であること示されたのである。

而しながら此ゝに於て推察するに一言にして突放した様であるが、そこに親鸞が真に領解してもらいたいお心持、それは親鸞の為ではなく尊いこの道の為に諒解してもらいたいお心が宿つているように思うのである。

他力念仏こそ久遠劫よりの間に、永劫の光を与え我々を苦惱より法悦えと導く、これが歎異鈔の信仰であり親鸞の他力信心である。

参考文献

梅原氏「歎異鈔講話」 西谷氏「歎異鈔講話」 曾我氏「歎異鈔聴記」 「本典」 「和讃」
「御文章」 「往生礼讚」 「選択集」 「安心決定鈔」 「本学教授 宗教学」